始

特111
862

皮の化

服部亮英 著

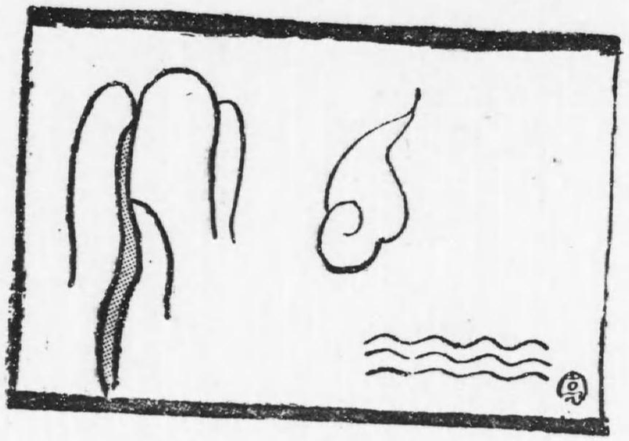
大正
8. 9. 13
内交

目次

ニヅトリ盗人……二
新婚早々のヘゞレケ……四
陰猛者の遠慮振り……六
死の神……八
如來の小軸……一〇
放蕩病の患者……一三
名號の襦袢……一四
碁好の泥棒……一六
狸公に化されて……一八
强盗の情夫……二〇
捧げた包は燒芋……二二
馬に喰はれた金平さん其一……二四
馬に喰はれた金平さん其二……二六
馬に喰はれた金平さん其三……二八
當世大馬鹿三太郎……三〇
宴會もどり……三二
美人と見えたは古狐其一……三四
美人と見えたは古狐其二……三六
嫁見の萬歲……三八
化病……四〇

自働車の流行……四二
玄關番とオサンの戀……四四
低能兒と怖氣小僧 其一……四六
低能兒と怖氣小僧 其二……四八
熊公と柳田 其一……五〇
熊公と柳田 其二……五二
徵兵檢査場の珍劇……五四
頭禿げても浮氣は止まぬ……五六
俄か華族の隱居さん 其一……五八
俄か華族の隱居さん 其二……六〇
手段の園碁……六二
春水の陣 其一……六四
春水の陣 其二……六六
行李の身替り……六八
百物語 其一……七〇
百物語 其二……七二
娘の精神病 其一……七四
娘の精神病 其二……七六
砂糖の幹盜人……七八
河童のいたづら 其一……八〇
河童のいたづら 其二……八二
五平を連れて田吾作の女房……八四
浮氣な宗教教育家 其一……八六
浮氣な宗教教育家 其二……八八

浮氣な宗教教育家 其三……九〇
無錢旅行の一夜 其一……九二
無錢旅行の一夜 其二……九四
とんだ處で高砂や……九六
母ちやんの嘘……九八
龜三と奥樣……一〇〇
猿といるか……一〇二
物を食はぬ女……一〇四
結婚後日譚 其一……一〇六
結婚後日譚 其二……一〇八
結婚後日譚 其三……一一〇
電燈屋に化けて嫁見……一一二
後から見た美人……一一四
身替り結婚 其一……一一六
身替り結婚 其二……一一八
船子さんの鐵面皮……一二〇
馬鹿常の馬賞め……一二二
屁の取り返し……一二四
化け僧の片袖……一二六



序

他人を化かさうとする者、又之れに化される者、二者何れにしても一枚の皮ひん剝けばそこには共通した一の眞理が覆在して居る、其れを主題として見たり聞いたりした物を單に集めたと云ふだけの物である。

ニワトリ盗人

夜中鳥部屋に忍び込んだ盗人が寝込みの鳥を十數羽まんまと盗んで歸らんと、途々急げど早や黎明の頃折惡しく交番の前を通り過さんとさし足、ぬき足、幸ひ査公は居睡り中、やれ難關も通り越えたと思ふ途端に背に負つた鷄が歌ひ出す、査公驚異の眼玉を光らしてマテッ……。

新婚早々のへゞレケ

品行方正學力優等とあるべき筈の新學士さんが新婚早々『へゞレケ』になつて歸る、妻君將來を案じ、貴方!!どうか御酒だけはよして下さいと歎願するとき新學士さん、廊の二階と間違へた物かとんだ處で舊惡露見どうか今晩は之れだけで宜しく賴むと、ポケットからザラ〳〵と銀貨を投げ出した。

蔭猛者の遠慮振り

砂黨、甘黨、食黨の猛者が揃つて恩師近眼先生の宅を訪問した時の事、近眼先生は大いに歡待するつもりで、山と積んだ饅頭を出して話の途切れ〳〵に『さあやり給へ』と進められたが三人は少しも手出しをしない、先生がふと隣室に立つた時、饅頭はペロリと三人が猛者振つた、先生再び着席、『さあやり給へ』と繰り返すと三人益々畏まつて手を膝の上に組んだ、近眼先生は益々すゝめて『やり給へ。』

死の神

作右衛門爺は毎日々々山坂を登つて、薪拾ひをするのが仕事であつた、今日も何時もの通り薪を脊負つて『ウン〳〵』ご呻き乍ら坂を下つたが、餘りの苦しさに木の根に腰を下して歎息しながら『あーあ自分は、何といふ不運者であらう、こんな年寄になつてかう毎日々々こんなに苦しまねばならぬ位なら一層死んだ方がましだ』とつぶやいた折柄後の方で『オイ〳〵俺れは死の神だがお前もそれ程死にたければ俺が連れて行かう』との聲がした作右衛門は吃驚して『イ、エ私は今何も申しませんでした』とあたふたと逃げ歸つた。

如來の小軸

佛壇の内へ如來の小軸を掛け朝夕念佛を唱へて居る婆さんがあつた、一日例の通り一心に拜んで居ると、『母さん何を拜んで居るの、肝心の如來樣は……？』と茶目さんの心附けで佛壇を見ると今まで鮮かに拜まれた如來樣の御姿は影も形もない『扨ては我信心の足りない所から御怒りになつて御姿を御隱しになつたのだ』と恐縮して其場へ平身低頭してしまつた、茶目さん『母さん僕が軸を裏返して置いたの。』

放蕩病の患者

放蕩に身を持ちくずし、積る借金にやるせなく紐か水か鐵道か、玆に病氣中には一切の面會を謝絶して煩悶を重ねる中、遊び仲間のKがやつて來て、どうだい君！今度は意外の收入があつたので君と快を共にしたいが相憎佛病氣ぢや仕方が無いねと云はれると、何の事はない、病人忽ち起き上つて、さあ何處へでも行かう〳〵。

名號の襦袢

家のお老婆さん朝夕の佛詣は三度の食事を缺いても怠らなかつた、或日商用をかねて京の本願寺へ參詣したが、永の道中を着續けた襦袢は自分と共に佛果を得たと喜んで色紙の幾重も當つて居るものを大切に仕舞つて置いた之を見た悴は可笑しく思つてお老婆さんの留守中に例の襦袢を取り出して脊中へ六字の名號と書いて元の通り仕舞つて置いた、とは知らないお老婆さん或高僧のお說教を聞きに行くのに例の襦袢を出して見ると南無阿彌陀佛の六字が顯れて居るので飛び立つやうに喜んだ三拜九拜して佛壇に供へ念佛を唱へて居ると外出して居る悴が歸つて之を聞いて吹き出したくなつたが餘り氣の毒に思つて『實は自分が戯れに書いたのだと白狀する。

碁好の泥棒

山邊と海野はヘボ碁の好一對であつた、一度二人が相對すると夜の更けるのを忘れる位の事か或時は泥棒の忍び込んだのも知らずに

『こう出たらどうだい』『さう出りやこう行かう』『此度はどうだい』と夢中になつて居ると泥的も矢張り好きな道なので本職を忘れて襖の陰から覗いて見たが二人とも如何にもヘッポコなのでつひおせつかいがしてみたくなり『あゝ君、そんなところへ出ては……あゝ』御主人山邊は別に怪しみもせず『エー八釜しい誰だい』と一目おくと泥『あゝいけねー〳〵それぢや駄目だ』主『餘計なお世話だ誰たい』一目……泥『へイわつちで……』主『何しに來ました』一目……泥『へイ泥棒に……』主『ム、それは夜中に御苦勞樣』一目……。

狸公に化されて

或男が未明に近村に行く途中まだ人顔もはつきりしない頃、一人の百姓が蕎麥の花が雪のやうに咲き亂れて居る間にうろ〳〵しながら、頻に『深い〳〵』と獨語して居るので『ハテナ』と歩を止めて見ると路傍の樹上に老狸が百姓を見つめて居る『彼奴だナ』と持ち合せて居た銃を取つてソツト近づいて轟然一發、狸公忽ち地上に墜ちた、百姓は同時に卒倒して悶絶した。

强盜の情夫

男が好くつて金持でも昔の高尾に陸奥の守をふつたとか聞く、當世の高尾は金次第で急ぐ情夫の格にして仕舞ふ、そして此の情夫なる者が前科何犯の大强盜と知れ、御用の縄がかゝつてもお構ひなし、ぢや暫らくいつていらつしやいと澄したもの。

捧げた包は燒芋

歳晩の曇つた或る日のこと京濱電車で大森海岸から大森行に乗換へた、澄した妻君が下女をつれて隣席した、下女は神妙に一包を捧持して居る、包はブン〳〵香を發して其内容を曝露して居る、電車は走る、香は益々高く妻君は益々澄して居る、一同は此の燒芋の香ひに魅せられ、且共鳴しやつて吹き出した、澄ましやの妻君も終に赤面して吹き出してしまつた。

馬に喰はれた金平さん（其二）

同僚の間にケチン坊、守錢奴、等と評判の宜しからざる金平は、常に官費の會合では時日を繰合せて出席するが、いざ私費となると一も二もなく斷つて仕舞ふ所が或る宴會戻りに惡友の飛田に誘はれて某樓に登る事になつたが扨遊興費を出す事になると金平さん、仲々頑强で少しも出し相にない。

馬に喰はれた金平さん（其二）

飛田は一策を案じ、金平を其の場に人質として置き去り、自分は早朝から金策に出掛けた、一方金平は待てども〳〵飛田は來らず愈々定刻を過ぎると馬屋の手に引渡される事になつた、こうなつても金平は懐中のガマ口を開け様としない。

馬に喰はれた金平さん（其三）

近來の馬は心得た物だ、馬が同志打をやる場合には構はぬが他人に手出しをすると、法律に抵觸する恐れがある、そこで甲の馬が乙の馬を捕へて甲馬『遊ぶにや當てがあるんだらう、おめえ持つてて出さゝいんだらう』等云つて乙馬を毆打する、此の活劇を見た金平は金よりも命が大事と懷中から取出して遊興費は僕が支拂ふ事にしよう。

當世大馬鹿三太郎

とある暗黒面の女に對し、此の通りだと第一の財布を綺麗にはたいて見せた男或る拍子にポケットの間からお紙幣が顔を出した、それを見て取つた女、早速すかさずまだあるぢゃ無いの、……さ。

宴會もどり

遊太君は例のおでんやでしたゝか呷つて景氣づけた揚句、或る家に藝妓遊びと洒落て見た、今日は宴會の歸りかげ何も入らぬから一本つけておくれ、と扨例の馴染には口先ばかりで虚勢を張り、どうも洋食は胸が苦しくつていかんよと云つてるうち、急に嘔吐を催うし、立騒ぐ中、蒟蒻、チクワ、八ッ頭等が其の儘飛び出して、切角の洋食も茲に化の皮。

美人と見えたは古狐　其一

七八十年も昔の事勇氣絶禀の秋山といふ者があつた、如何な怪物に遇つても未だ曾て恐怖したことがなかつたが、或夜隣村へ行くのに或山の一ッ橋と云ふ所迄來かゝつた時、一人の女に出會つた、その女が如何にも怪しいので『是れは屹度此邊に住むおさん狐の仕ぐさだなと想像して其後を追つた、或石橋まで來るとその女は橋を渡るのに手をついて飛んだやうに見えたから秋山は『己れッ』と直ぐ刀を拔いて斬り捨てたがその屍を見るとまことの女で狐のやうには見えなかつた。

美人と見えたは古狐　其二

是れを見て秋山は吃驚仰天し急に家に歸つて具に委細を話して再び其所へ見に行くと、全く女に相違ない、益々驚いて復家へ歸つて殆んど氣を失ふ程心配した、明け方になつて家の者が一人で其所へ行つて屍を見ると此度は老狐が倒れて居た。

嫁見の萬歳

春になると或る地方では農家の若者が俄か萬歳となつて嫁見に出かける風習がある、好い娘の居る家となると、貰ひが有らうが有るまいが、時間かまわず歌つて躍る、さうして一軒毎に色男役の萬歳が才三と交代して勤めて居る。

化病

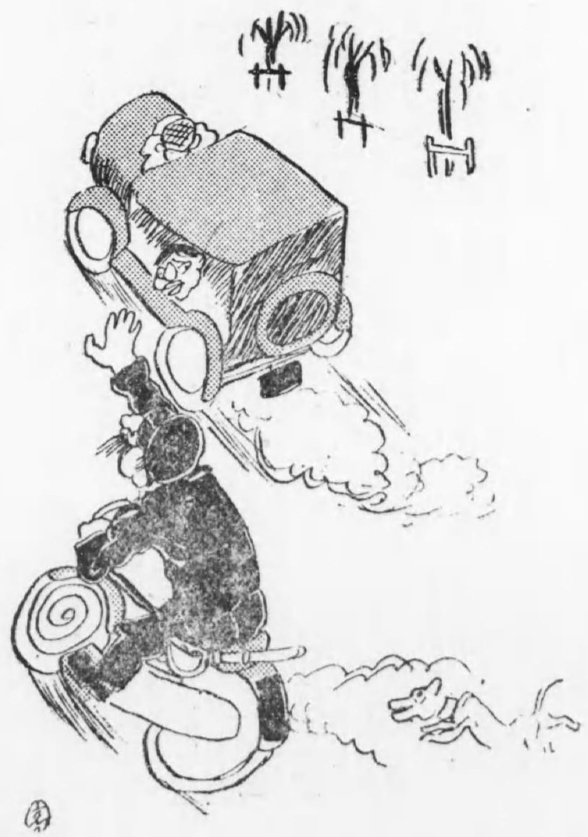
今日は少し用があるから來客があつても風邪で臥せつて居ると云つて置きな、と家内の者に云ひ含めて、好きな盆栽いぢりをやつて居ると、表から訪問のベルが聞えて來る。

取次に出た茶目さん『お父さんは今お庭に居ますけれど風邪で臥せつて居ると云つて置けと云ひました。

自働車の流行

自働車で飛び廻るのは一流の人達に限られて居たが今日では猫も杓子もこれでなければならぬやうになつた、所で泥棒も幸な利機として化の皮を被つて眞晝中を横行する、

そこで査公もオートバイの必要となつてサタンやジゴマの後を追駈けて居る。



玄關番とオサンの戀

彼の女にはあれ丈の資産があり、毎日奏でるピアノの音は慥かに天才である、さうして彼女のデップリと豐滿な肉付よ、僕の將來を語らう人は彼の女を置いて外に誰あらうと睨んだのは隣りの玄關番であつた、處が當方の下女君の意中は、少なくともあれ程の西洋館に洋書を積んで悠々となさる末たのもしき若旦那よ、戀し〳〵と憧るゝ中、お互の生活があから樣に知れてしまつた。

低能兒と怖氣小僧　其一

怖氣物の小僧、壇徒の法要を濟しての歸途例の墓地の側を通りかゝると夕靄の中に、白い人が呆然と立つて居る、之れは必然亡者と早合點し傍目もふらずに道を急ぐ。

一方亡者と見えたは同村の低能兒で母親の外出を迎ひに出たが未だに歸らず、幸、村の小僧さんが來たので同道の後を追つて歸る事とした。

低能兒と怖氣小僧　其二

急げば益々追つ駈けて來る亡者に愈々恐れをいだいて、村端づれの土橋に差しかゝつたとき怖氣小僧もこゝぞと思つたか滿身の勇を揮つて後より追つて來る亡者を河中に投げ込んだ、あはや助けてーと悲鳴を揚げた、見れば村の「のろ松」であつた。

熊公と柳田　其一

鐵砲の熊と綽名された喧嘩好きの熊公は對手の弱味を見ると急ぐ、喧嘩の種をまく、或る日熊公は例の如く安閑と村端づれの細道に差かゝらんとしたとき、丁度向ふから年若き小男の來たのを幸ひ、一喧嘩吹つかけた、すると、小男の柳田は平身底頭して詫つたが熊公はどうしてもきかない。

熊公と柳田　其二

熊公『そんなに詫るなら逆立ちになつて之の大木を動かせい。』さすれば許すと益々弱味に付け込むので柳田は之れ迄と柔道で見事投げ飛ばし躍り上らんとする熊公をあべこべに大木に縛りつけ、どうだ此の木を逆に持つて動かして見ろ。（詫る者必ずしも弱者にあらず）

徴兵檢査場の珍劇

徴兵檢査に忌避せんと初めつから終りまで「つんぼ」で通して胡摩化した結果はまんまと「丙種」に廻され漸く安堵の思ひに喜色滿面我が家を指して歸らむとすると き後から、何村の何藏と自分の名を呼ぶ物がある『オーイ』と返事をして後を向くと之れは如何に檢査官の奇計につんぼの化の皮。

頭禿げても浮氣は止まぬ

昨夜はYの處で痛飲の結果一泊して今戻つたと白々しい噂をたてゝ、あゝ自今禁酒だ頭が重い等と就床して急ぐ白河夜船の高鼾き、そこへYが來た、妻君慌しく昨夜は終くまで種々馳走に預りましてと丁寧に挨拶されYの些か躊躇する中、妻君ムカ〳〵ッと禿爺父の胸にすがりつき、くやしい〳〵……。

俄か華族の隱居さん　其一

立ちん坊の捨松は、自分の娘が此程某華族の妻になつた處から始めての洋服姿に或席に招かれたが、小さいコップに小量の酒を飲むよりは娘よ何もいらん波の花で、カブトを一ぺーおくんなさい、との要求に之れも親の爲ならと、一升桝に灘の生一本と云ふ處をなみ〳〵と酌んだ、捨松悅に入り之れを飲干した。

俄か華族の隱居さん　其二

愈々お寢間へ案内された捨松は、夜中ふと立ち上りどうも絹夜具なんかは、ぞく〳〵寒氣がして寢られやしねえ、と庭石傳ひに車夫の待合を辿つて椽の下に菰を着て寢る事にした、一層此の方が身體に附着て暖けえー、等と云つてると提灯持つた家令が、御隱居樣御隱居樣と呼んで居る、實に華族は不自由ぢや喃。

手段の圍碁

常々から隣の川邊藥舗製のハンゴン丹が素晴しい勢で盛に賣行くのを羨んだ同業者の萬中はその原料が何物であるかを聞きたさに樣々の手段で彼れに詰ちつてみたがいつも川邊は話をそらせて白狀しない、そこで萬中は一案を繞らした、川邊と萬中は圍碁の相棒であるのを幸にこの機を利用することである、二人が碁盤を圍んで益々興の乘つて來た時、

萬中『伊勢は淺間の萬金丹』と一目置いた。

川邊『越中富山のハンゴン丹』と返した。

〆たと思つた萬中すかさず「ハンゴン丹のその極意」と一目出ると川邊『川蜻蛉の黑燒で……。』

脊水の陣　其一

或海岸で一人の成金風の男が逍遙して居ると遙か向ふの方から二人の刑事が何か獲物もがなとぶらつきながらやつて來た、件の男の樣子を早くも怪しいとにらんだ刑事はすぐその後をつける。

脊水の陣 其二

件の男これは先手を越されたと道を轉じて見たが刑事の追跡が益々急なので進退谷まり愈々本性を顯し出刄庖丁をきらめかして脊水の陣を張つた。

行李の身替り

病氣だから急ぐ金を送れと白々しい嘘の文句を上手に並べ立て郷里なる爺父に宛てゝ一通の書を送つた、之れを見た子煩腦の爺父は心配の餘り早速駈けつけて見ると之れは驚いた悴は獨りで喚き苦む事と思ひの外床の中には行李の蓋がどつかと寢そべつて居る、

一體悴はどうした事か些か狐につまゝれた態であるすると悴がニュッと顏を出し『おやぢ殿今醫者から戻りました……』

百物語　其一

百物語と言事があつた、それは先づ燈心を百筋灯し青紙ではり各自の刀脇差等を秘し恐しい咄一つして燈心一つ消すといふ様に百筋悉くすると化物が出ると云つた物だ、或若侍六七人集りてこの百物語をやつた。

漸次咄して行く中夜も漸く更けた、咄も漸く百に充ちた、一同待ちかねて居る中眠氣がさしてどろ〳〵とやりかけた。

百物語　其二

その中一人の侍が火鉢の中から白い女が顯れた、といふので一同驚いてそれ出たと騒いで居る、折那化物をとらへたといふものがあるのでそれ手觸だ提灯だと呼んで燈を持つて來て見ると、臆病な侍が目をまわして倒れた足をつかまへて居たとさ。

娘の精神病　其一

薄給取りの磯山の内は或家と同居した、二三日經つと何處からとも知らず茶碗がこんで來たり皿が舞つて來たりする、餘り不思議だと氣味惡く思つて居ると或日忽然障子から發火した、ふいの出來事に吃驚した磯山の夫妻子は命カラ〳〵飛び出した。

娘の精神病　其二

近所の人の話では同居した者は皆二三日で出てしまふ何か變化のある家だとのことであつた、委細の樣子を話してお巡査さんに取調べて貰ふと、同居者の娘が精神病で人の騒ぐのを見て喜ぶのだといふ難物と知れた。

砂糖の幹盗人

新吉、豆三の二人は農園に作られた砂糖の幹を盗みに行つた、まんまと一本宛を懐中にかくして立歸らんとするとき急に園丁の大聲一喝コラッ、二人は慌てゝ逃げんとしたが何しろ、串にさした海老同然、飛ぶ事も跳ねる事も出來なかつた。

河童のいたづら　其一

田舍大工の女房が洗濯物をすゝぎに川へ行つた、暑い日の事とて河原の石に腰を下して一休みして居る片方の足を掴んでグン〳〵引く者があるので何氣なく水面を見ると七八ッ位の子の頭が見えた、女は其の時屹度これは水に溺れたのだらうと思つて引きあげやうとしたがどうしてものか却つて自分の足の方が益々引張られる。

河童のいたづら　其二

女は不思議に思つて聲をかけて見たが只足を益々強く引く、此度は氣味が惡くて力まかせに足を引きあげる途端、子供の頭もフラ〳〵ッとしたと思ふと河童がニュッと飛び出した。

五平を連れて田吾作の女房

四歳未滿は汽車賃が要らないと聞いた、田吾作の女房、當年取つて七才の五平を連れて宮參りと洒落た、處が小兒に惡智慧をつけ若し聞かれたら四ッと云へ、と重い五平を脊負つて改札口に出やうとしたが、改札係が突然ボーやは幾歳だと問はれて、五平は『七ッになつた』

浮氣な宗教教育家　其一

或る宗教家で然かも教育家と云ふ堅苦しい肩書を持つた男、旅行先で或旗亭に登つた。

酌婦は頗る容貌の調つて居る、そこで膝を枕に仔細を聞くと元、家は相當の舊家であるが淪落の果はこんな處に居る事と分つた、宗教家は心から同情して彼女を身受けする事に定めたが扨、其金策は斯うだ。

浮氣な宗教教育家　其二

早速妻君に一夜の淸遊を物語つて、是非其の女を救つて、元の無垢の女にしたい、と同意を求めたか、妻君も熱心な信者なので、身代金を出す事とした、そして、女は私の膝下に置きましようと妻君の發意に、夫君は否彼の女を家庭に入れる事は危險だ、それより或る場所に置き一定の職を與へ自立さす樣にしたいと述べた。

浮氣な宗教教育家　其三

それ以來夫君は朝早く夜遲くまでの精勵に妻君些かやきもきの態である。

或る日夫君の跡を尾行して見ると、救つた女の前で亂らな始末である、妻君、斯うなつては教育も宗教も上の皮の着物同　脫ぎ捨て裸むき出し嫉妬の齒ぎしりでムシャブリ付いた。

無錢旅行の一夜 其一

貧助と吉松の二人は將來活社會に出るには如何しても困苦缺亡と戰つて目的を遂行するの必要から無錢旅行を思ひ立つた。

早速旅裝を調へ豫定の行動に就いたが、其の夜疲れた二人は休養するに適當な場所が見付からず、とうとう稲荷の祠を拜借する事に定めた。

無錢旅行の一夜 其二

祠の前には狐面の懸額がある、之れを失敬して二人の俄か稲荷は此祠の神體になり澄した。全日の疲れにまどろむ中、若い女の祈願の聲が聞える、貧助は早速狐のお面を冠つて戸を細目に押し開く、中から吉松、『願ひとあらば聞いて遣す程に明日未明に赤飯と油揚を此の祠前に持參致せ』と女は畏つて下つた、翌朝二人は朝食を無事に喫して次の旅程にスタコラ〳〵。

こんだ處で高砂や

馬鹿常、此度親戚の嫁入に招かれ是非高砂やを謠はねばならぬとあつて、毎日熱心に稽古を勵んだが扨其當日となつて見ると謠ひ始める時が解らない、止むなく同じ新客に依頼すると、袖を引いたら謠ひ出す樣に話が定まつた。愈結婚式となると元來農家の事とて飼牛に袖を引かれ一同まだ着席もしないのに大聲一番

『タアーカアーサアーゴヲヤー』

母ちやんの嘘

最新流行の衣裝で澄しこんだ妻君、牛肉屋の前に立つて、聲を低くし犬にやるんですから細切れを十錢下さいな。

側から茶目子『母ちやん家に犬なんかいなくつてよ……。

龜三と奥様

奥様が下女下男に訓して云ふには、私の入浴中は必ず、浴室の戸をあけてはならぬ要談があつたら外から云つてと扨、こうなると好奇心にかられた下男の龜三秘かに戸の節穴より窺視みれば、奥様の身體は驚くべき文身であつた、あな恐ろしや奥様の前世!!。

猿といるか

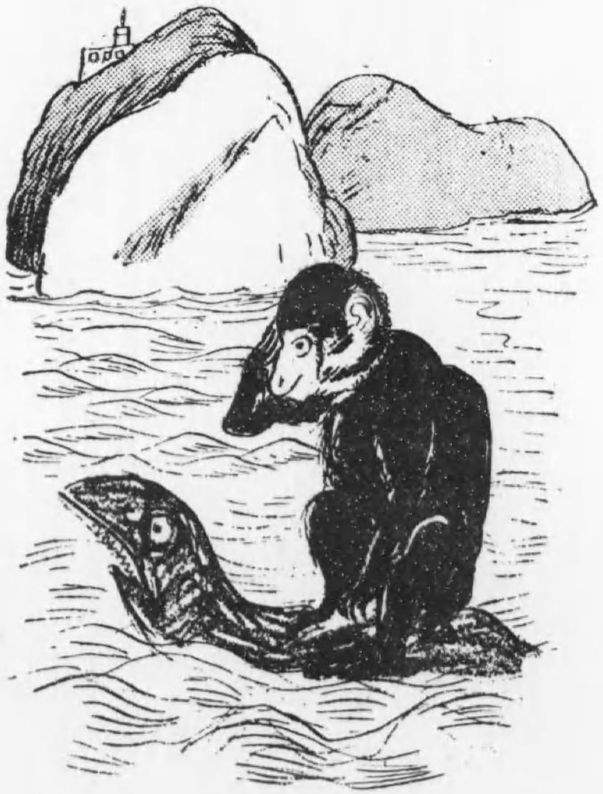
昔ギリシヤの海岸で一隻の汽船が沈没した其の中に猿が居た、所が元來泳ぎが出來ないので苦しんで居ると海豚が人間だと思つて呑の上にのせて助け『貴君はアデンのお方かネ』と聞くと、

猿『俺はアデンの華族の子だ』と答へた。

海豚『其ならピレースを御存じでせう』

猿『ピレースは俺の友達だ』と云ふと海豚は『此嘘つき奴、ピレースは港の名だそんな奴は勝手にしろ』と海の中に投げ落した。

（イソップヨリ）



物を食はぬ女

或吝嗇の男が年頃になつて人から嫁を取れと進められても、日々食べさせるのが吝しさに聞き入れなかつたと或日非常な美人でまだ年波も行かぬ娘が道に迷つて一夜の宿を借りに來たそして『私は決して食事をしません』と云つて一椀の飯も食べなかつたので男はこんな美人で物を食はぬとは俺れの理想の女だと思つてウザ〳〵で自分の者にしたそして近所の誰彼に自慢して歩いた、幾日かの後になつて男は買ひ置いた米の減るのを不審に思つた或時外出する振をして家を出てソツト立ち戻つて内の樣子を窺いてみると男は驚いた。

綺麗な女だと思つた自分の妻は鬼の樣な姿となつて頭の眞中が二つに割れて居るそして何時の間に買つたものか生肴の五六匹と數知れぬ握飯をその中へ投げ込んで居た。

結婚後日譚　其一

僕は貴女に對して滿腔の愛を捧げて居ます貴女の前には新らしい學位と巨萬の富とを積んで迎へるのを待つて居ます、僕の心情を御容れ下さるなら○日午後○時某公園まで御來駕を乞ふ、法學士何某。

結婚後日譚　其二

私は某女學校を首席で出身しました、父は現在○○會社の重役でこれだけの財産を持つて居ます、私は父の秘藏ッ子ですから私の要求を無視するやうな事は致しません……』

父親を楯にあらゆる自尊と自惚れとを並べ甘い文句で戀は成立した。

結婚後日譚　其三

お互に悦に入り憧れて居る間は双方の美しいところばかりが目についたが、扨て愈々結婚して戀もさめ年も重なるにつれ、

夫『何だお前なんか結婚當時にはその行李一つが財産だつた……』

妻　アラ貴方だつて机と本箱一つの素貫貧の書生上りでしたのに……』

電燈屋に化けて嫁見

如何にせばあの箱入娘を見る事が出來るかと思案の揚句電燈屋に化けたY君電球を調べに來ました、それから甚だ恐れ入りますがお茶を一つ、と娘の顔をヂロ〳〵ながめ、私の親爺が會社の重役で、伯父が社長でと尋ねもしないのにY君は大法螺を吹いて歸つた。

後から見た美人

學校を出て勤め先も定まり愈々妻君の候補者を物色する頓吉、或る夕方　散歩先で素的な後姿の女に出會した、之れを尾行すると女は羞む如くパラソルに顔を益々かくして行く頓吉は如何なる天女の下りてかと、ある途端にお顔を拜するとこは如何に……

身替り結婚　其一

年頃の娘、鼻子は自分が持つて生れた醜貌を今更らしく氣にとがめ、如何に之れを改造すべきかと毎日鏡と睨めつくら、處が或る縁談があつたので漸つと安堵の思ひで愈々見合ひとなつた、そこで一策を案じ、兼て親友の間柄なる美人の玉子に身替りを云ひ含めた、すると先方も仲々の好男子とあつて、直ちに話しは纏まつた。

身替り結婚　其二

あの男なら將來を語るに足ると本人に申聞かしたが先方でも同じ事、あの女なら君の妻君として保證付……だ等と云つて居る。

ところが、結婚式となつて見ると鼻子も主人『花男』もお互に、あれなれば自分より少しは好い男、好い女に見えて、芽出度茲に式を終了る事になつた。

船子さんの鐵面皮

船子は良平との間に秘密の種を宿し既に五ケ月となつた、玆に些か羞恥心を呼び起こすかと思ひの外、お父様お隣りの○子さんは結婚もしない中から、懐姙ですつて、隨分だらしが無いわねえ。我が子の事とは露知らず、

爺『むうそうか〜……。』

馬鹿常の馬賞め

隣家の佛壇を賞めるに結構莊嚴ですね……と後ろに廻り惜しい處に節穴がありますね紙でも、お貼りになつたらと敎はつた通りに臺詞を並べて歸れば馬鹿常も普通の人と異る處はないが、此の筆法で隣りに馬を買つたから見て呉れと云つて來た、常さん、早速出掛けて成程好い馬ですね……と後ろに廻り尻をなでゝ好い馬ですが惜しい處に穴がありますね、之れや紙片でもお貼りになつたら……。

屁の取り返し

邪慳の姑御自分で放屁をし乍ら側の嫁に向ひ『隨分だねー默つてお奈良をするなんて』

嫁『おゝ母様どうも濟みませんでした、然し母さんお奈良は種々の德があるんですつて、第一長命をする第二に福が授かるんですつてと屁の効能を並べ立てると姑『ぢや今のは全く私のだよ』と屁の取り返しをする。

化け僧の片袖

新世帯の一家で妻君が二階に病臥し夫君がお勝手に居ると、ニュッと現はれた坊さん、『毎度奥様に頂戴して參ります、つい近所の何々寺で御座ひますどうかお米をと大きな金鉢を出した、夫君は景氣よく入れてやると、急ぎ私も頂き度いと更にも一人が差出した、折柄妻君二階から之れを留めた、坊さん慌てゝ器を取り戻さうと思ったが、扨は己れ法衣を着けて人を僞る惡僧めと力自慢の夫君は坊主の腕をひつ攫む途端、化の皮の片袖落とし何處へか姿を消してしまつた。

漫畫双紙

(1) 嫁さがし　近藤浩一路氏著
(2) 燒酎と鹽鮭とバナヽ　清水勘一氏著
(3) 酒の虫　山田みのる氏著
(4) 僕の學生時代　池部釣氏著
(5) 戀と算盤　漫畫會同人著
(6) 娘ざかり　細木原青起氏著
(7) 頓智李太郎　在田稠氏著
(8) 漫畫風流　前川千帆氏著
(9) 化の皮　服部亮英氏著
(10) ずんべら物語　近刊　小川治平氏著
(11) 可笑味　近刊　岡本一平氏著

各冊四六判美裝
壹冊正價金五拾錢
郵税金四錢

大正八年九月七日印刷
大正八年九月十三日發行

◆化の皮◆
（正價金五拾錢）

著者　服部亮英

發行者　東京市日本橋區鐵砲町六番地　磯部辰次郎

印刷者　東京市神田區淡路町十番地　今成温平

發行所　東京市日本橋區鐵砲町六番地　磯部甲陽堂
振替東京一五〇五六番

不許複製

岡本一平著並畫　漫畫と文　物見遊山　四六判洋裝　正價金七拾五錢　送料金八錢

岡本一平著並畫　漫畫と文　マッチの棒　四六判洋裝　正價金七拾五錢　送料金八錢

岡本一平著並畫　漫畫と文　欠伸をしに　四六判上製　正價金九拾錢　送料金八錢

岡本一平著並畫　子供畫噺　珍助と平太郎　菊判半截上製　正價金八拾錢　送料金六錢

近藤浩一路著並畫　漫畫漫文　極樂めぐり　四六判上製　正價金九拾錢　送料金六錢

近藤浩一路著並畫　漫畫　巡禮記　四六判洋裝　正價金九拾錢　送料金八錢

服部亮英著並畫　漫畫　の兵隊　四六判洋裝　正價金五拾錢　送料金四錢

東京漫畫會同人著　漫畫　双紙（一より各編）　四六判洋裝　各冊一冊五拾錢　各冊送料四錢

今井藻水著　頓狂男と自惚男　菊判半截上製　正價金八拾錢　送料金六錢

末廣鐵腸居士著　縮刷　西洋物見　啞の旅行　三五判特製　正價金九拾錢　送料金六錢

N 1/1
1097

終